

甲南大学 総合研究所報

甲南大学総合研究所 〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1 電話 (078) 435-2331(ダイヤルイン)

第38回 甲南大学総合研究所公開講演会

植民地経験のゆくえ—「帝国」を再考するために

講演者 井野瀬 久美恵 氏

(甲南大学文学部教授)

安西敏三所長：

皆さん、こんにちは。総合研究所は毎年春・秋に講演会を開いております。今年は少し遅くなりましたが、暑い中を総合研究所の講演会にご出席くださりましてありがとうございます。私は総合研究所の所長を努めております安西と申します。

本日は最近出版されました「植民地経験のゆくえ」という本—これは各新聞の書評にも出ておりました。また、読売新聞にこの本について井野瀬先生自身が書いておられますので、これを今日皆さんにお配りしています。

井野瀬先生は京都大学文学部英文学科と西洋史学科で学ばれて、その後大学院では西洋史を専攻されました。卒業されてからは追手門学院大学から甲南大学文学部英文科の先生として現在に至りご活躍されておられます。総合研究所におきましても各研究チームというのがありまして、井野瀬先生には毎年のように参加していただいております。著書は案内のパンフレットにありますように「大英帝国はミュージックホールから」「子どもたちの大英帝国」「女たちの大英帝国」「黒人王、白人王に謁見す」などがあります。いずれもたいへん好評であり、甲南大学のみならず全国的に著名な先生であられます。現代論もされております。本日は「帝国」という問題で



特に大英帝国というものが、現在のアメリカのイラクへの問題を含めて帝国主義というものが改めて考えられる。「帝国」という本も大変売れている、あるいはそれに関する議論も多いということで、アメリカ帝国主義との対比の上で大英帝国—帝国主義の本場といわれる19世紀のイギリスの帝国主義とに

ついて比較したい、研究したいということです。これについても井野瀬先生は現代的な視点を持っておられ、我々が戦争、帝国のことを考える上で貴重なお話をしていただけだと思います。今から90分ぐらいの時間ですがご静聴よろしくお願い致します。

井野瀬久美恵先生

ただいまご紹介いただきました甲南大学文学部の井野瀬と申します。本日はどうかよろしくお願い致します。

今、安西先生からの的確にご紹介いただきましたが、皆様のお手元にあるピンク色のチラシに並べさせていただいた私の著書、とりわけ単著に共通しておりますのは、「大英帝国」という歴史空間の名称です。我々は、過去の歴史を引きずりながら現在ここにいるわけですが、それはイギリスも同じです。現在でこそ島国ですが、イギリスには「帝国であった過去」があります。それが現在のイギリスの政治や経済、社会や文化にどういう意味を持っているのか——私は、それをずっと意識しながら研究してきました。

一昨日（6月30日）付けの読売新聞に掲載された私の記事をご覧になった方、いらっしゃいますでしょうか。「植民地から戦争を問う」というタイトルで、「帝国という過去」が今のイギリスとどのように関連しているかを語ったものです。そこに添えた二枚の写真の女性たち、メアリ・キングズリとアリス・グリーンが本日の主人公であり、彼女たちの「植民地経験」と「そのゆくえ」が本日の講演の中心です。ではなぜ、今この二人の女性の「植民地経験のゆくえ」を問わねばならないのでしょうか。まずは、この問題を、現代国際政治の文脈のなかで考えることから始めたいと思います。

なお、最近私はパワーポイントという「講演の武器」を使うことを覚えました（笑）。本日の講演も、パワーポイント、お手元に配布した資料、そして私自身の語りという「三位一体」で楽しんでいただきたいと思います。多少明かりが落ちるかもしれませんが、明るいうちに資料番号を確認しておきましょう。資料①はメアリ・キングズリの略歴、資料②はアリス・グリーン の略歴、すなわち本日の主人公たちの生涯をまとめたものです。メアリ・キングズリは当時、西アフリカを旅したレディ・トラベラーとして知られておりますが、彼女が旅した西アフリカを資料の地図①に、地図②はその拡大図と

なっております。地図②の地域を旅したことによって、メアリ・キングズリは一躍脚光を浴びることになりました。地図にあるランバレネという地名にご注意ください。ここは、ノーベル平和賞受賞で知られるアルベルト・シュヴァイツァー博士が療養所を開いたことで有名な地です。ちょうどメアリ・キングズリがこの地を去ってから20年足らず後、シュヴァイツァー博士はここを拠点に活動しました。メアリとシュヴァイツァーが西アフリカの自然をどのように見ていたか、両者の比較を資料④でしたいと思います。

資料⑤は、今日の日本ではまったく忘れられているかもしれませんが、忘れてはいけないという戒めを込めて、南アフリカ戦争（第2次ボーア戦争）に関連する年譜です。この戦争が現代の戦争、二〇世紀の戦争の先駆的存在であったのはなぜかを考えながら、この戦争と本日の主人公である二人の女性たちがどのように向き合ったのか、そこにわれわれは何を見るべきか、などについて、資料⑤⑥を使いながらお話ししたいと思います。資料⑥の手書きの文字はアリス・グリーンのもので、彼女が南アフリカ戦争の捕虜収容所が置かれたセント・ヘレナ島で聞き取り調査した日誌の一節です。全体は300頁余りもあります。彼女は、聞き取り時に走り書きしたものを、記憶が薄れないその日のうちに清書したようです。ですから、その資料にあげたように、とても読みやすい文字で、私はとても助かりました（笑）。また、走り書きしたものと清書したものとをつき合わせて、内容の詳細にさらに踏み込むこともでき、今思い返しても、彼女の日記を読む「旅」はとても楽しいものでした。その雰囲気を知っていただきたく、資料⑥にアリス・グリーン の直筆文字を載せたのです。人間は文字に人格が現れるといいますが、彼女の文字を見て皆さんはどんな性格をアリス・グリーンに想像されるでしょうか。

<「帝国」という現代世界のキーワード>

では、本論に入らせていただきます。

まずは前置きの、今なぜ「植民地経験」を、それも「女たちの植民地経験」を考えなければならないのか、そのゆくえを追う必要があるのか、そこから始めたいと思います。

（パワーポイントを見ながら）ここに二冊の書物をあげました。一冊はイタリア人で投獄もされたアントニオ・ネグリ、そしてマイケル・ハートの二人

の手になる話題の書、『帝国』です。日本語訳もあります。もう一冊は、東大の藤原帰一先生が書かれた『デモクラシーの帝国』（岩波新書）です。アフガニスタン戦争以来、いいえ、アフガニスタン危機といわれた時期からといっていいでしょう、われわれの頭には、アメリカが、圧倒的な軍事力を背景に、ある種「帝国」としての権力と影響力を全世界的に行行使してきた様子とともに、その権力と影響力のなかで、戦争が、そして戦争の原因までもが捏造されたことが、記憶としてしっかり刻み込まれていますよね。最近アメリカを「帝国」として読み解く本が、この二冊以外にも非常に多く出されています。このパワーポイントの写真は、韓国の人たちによる反米デモの様子を伝えるものですが、見出しをごらんください。“The Arrogant Empire”、すなわち「傲慢な帝国」とアメリカを呼んでおります。前代未聞の権力を全世界に行行使してきたアメリカ、ブッシュ大統領はそれを悪化させただけ——。もはやアメリカは「帝国」として捉えないと理解できない、そう考える人びとが世界中で増えています。そして、アメリカを「帝国」として読み解く現在の国際情勢が、かつて帝国であった過去をもつ国々にさまざまな波紋を呼んでいるのです。

かつて帝国だった過去をもつ国——ロシア、中国、イラン、そしてもちろん日本もそうでしたね。そういった国々では、帝国とは何だったのか、帝国が消滅するとはどういうことなのかをめぐって、多くの議論が重ねられてきました。とりわけ大英帝国、イギリスは、ナポレオン戦争に勝利してヨーロッパにおける覇権を決定的にした1815年から、第一次世界大戦が勃発する1914年までの一世紀間、わが世の春を謳歌しました。敗れたナポレオンがセント・ヘレナ島（この島の名前を記憶しておいてくださいね。話の後半にまた登場しますから）に流刑にされたのが1814年。そこを脱出した彼が最終的に敗北したのが翌1815年。それから第一次世界大戦が勃発する1914年までの100年間、世界秩序の中核にあったのはイギリスでした。

1997年、皆様もまだご記憶かと思いますが、華々しい儀式で挙行された香港返還により、地図上、大英帝国という空間はほぼ消滅したという感があります。その一方で、このことによって、イギリス社会のさまざまな場で、「帝国を失うことによって、われわれは結局何を失うのだろうか」ということが問われるようになっていきます。理由はきわめてはっ

きりしています。20世紀の終わりから21世紀初頭にかけてのイギリス社会を浮遊する一つのキーワードが、それを物語っています。「アイデンティティ・クライシス」——アイデンティティ、自分がいったい誰なのかということ、それがクライシスに、つまり危機的状況にあること。イギリス人たちは今、「自分たちイギリス人とはいったい誰なのか、イギリス人であることはどういう意味をもっているのか」ということに深い危機感を抱いているのです。テレビ番組で「イギリス人とは何なのか」を問う議論には歴史家も動員されています。実際、この「アイデンティティ論争」の火付け役は、リンダ・コリーという有名な女性歴史家でした。

イギリス人が自分自身を見失っている。その理由のひとつには、装いも新たに台頭した「ヨーロッパ」の存在があげられます。EU（ヨーロッパ連合）は、内部的な統合を深めながら東へと拡大し、そのメンバーを増やしてきました。イギリスもその一員ではありますが、イギリスには伝統的に「イギリスはヨーロッパの一部ではあるけれど、ヨーロッパではない」という考え方があるのです。チャーチルがかつてそう明言しましたし、サッチャー元首相も「悪いものはすべて（ヨーロッパ）大陸からやって来る」と語って、イギリスとヨーロッパの違いを強調しました。

1997年、ブレア政権が誕生したとき、新首相は「イギリスはヨーロッパの一員であり、ヨーロッパとともに生きる」とマニフェストで明言しました。しかし、それは必ずしも実行に移されているわけではありません。イラク戦争では、アメリカとの「特別の関係」から、ブレア首相は「ブッシュのブードル」と中傷され、国民世論との格差を見せつけました。アメリカ批判を展開したフランスやドイツとの差はあまりにもはっきりとしていました。そのなかで、「ヨーロッパと共に生きる」ということがきわめてわかりにくくなっているのも事実です。「ヨーロッパ」とイギリスはどのようにつきあえばいいのでしょうか。チャーチルの言葉が亡霊のようにイギリスじゅうをさまよっているかのようです。

ウィンストン・チャーチルの「ヨーロッパ合衆国（United States of Europe）」構想は、現在のEUの母体ともなった考え方です。それは、1946年、第二次世界大戦終結の翌年、正式に提起されました。国際連合という組織のみで国際秩序の維持を図ることはむずかしいと考えたチャーチルは、国連を支える存在として、アメリカ、ソ連（冷戦体制の崩壊後

消滅した、今は亡き大国です)、大英帝国を有するイギリス、そしてヨーロッパ合衆国の4つをあげ、この四本柱で国際連合を支えようと主張したのです。彼のこの主張には、「イギリスはヨーロッパではない」という考え方が貫かれています。では、ヨーロッパとイギリスの関係はどうあるべきか。このイギリスの悩みは、チャーチルがイギリスの存在を依拠していた「帝国」の消滅で、さらに深まったのです。

では、イギリスにとって「帝国」とはいった何だったのでしょうか。

それに答える一冊の本が、イギリスで大ベストセラーになりました。オクスフォード大学の気鋭、歴史家ニール・ファーガソンが、その名も文字通り『帝国 (Empire)』という著作を出版しました。2001年に書かれたこの本は、今でも駅のキオスクで平積みされています。けっこう厚いのですがよく売れ、アメリカ版 (2003年) も出されました。2003年1月最終週から2月にかけてはチャンネル4で6回シリーズのテレビ番組となっています。それを見た私は非常に驚きました。私だけではないでしょう。なぜなら、徹頭徹尾「大英帝国はいい帝国だった」という論調に貫かれているからです。イギリスは、自由貿易の帝国主義、博愛主義の帝国であり、世界の四分の一、すなわち大英帝国が支配していたアジアやアフリカ、オセアニアといった地域に、思想の自由、自由貿易、法律遵守の精神を広げ、鉄道や港を築き、教育の普及に努め、議会制度を根づかせて、グローバル規模での世界福祉を推進し、世界じゅうの人びとを幸せにした——これがファーガソンの主張です。文化的にも、英語という言葉、ラグビーやフットボールといった団体スポーツ、それを通じてフェアプレイの精神を広めたことなどを、イギリスの業績として高く評価するのです。だから、大英帝国がなければ世界はもっと不幸だったにちがいない——こう語る彼の言葉に、私はほんとうにびっくりしました。

確かに大英帝国には、ファーガソンが言うようなプラスの貢献があったでしょう。しかしながら、「イギリスが植民地にしてあげたこと」だけを考えては、「帝国」の姿は一面的なものでしかありません。重要なことは、その逆のベクトル——イギリスという中心が周縁である植民地にしてあげたことではなく、植民地に行っていたイギリス人が何をイギリスに持って帰ってきたか、それがイギリスをどう変えたのか、あるいは変えられなかったのか、そ

れを問うことではないでしょうか。植民地での経験、植民地で学んだり理解したりしたことが、イギリス人を、イギリス社会をどう揺さぶったのか。なぜそれが今まで問われなかったのでしょうか。それを問わなければ、ニール・ファーガソンが貫いた論調——「大英帝国はいい帝国であり、イギリスの帝国主義は素晴らしいものであった」——が再生産されるだけでしょう。私にはそれが非常に気がかりなのです。そうしたノスタルジアを食いとめるためにも、ベクトルを逆転させること、すなわち「本国から植民地へ」の目線を逆転させることが必要かと思われまます。植民地から本国にどのような経験や理解、考え方、あるいはモノや情報が持ち込まれ、それが本国イギリスをどう変化させたかということ——言い換えれば、植民地経験のゆくえ、を探ることの意味はここにあるのです。

「植民地経験」という言葉は、現場に立つこと、つまりアジアやアフリカなどの植民地に現実に行くこと、を連想させます。ただし、実際にイラクに行かなくてもイラクの情報を (たとえ一部であっても) われわれが知っているように、「経験」の中身は、単に現場に立つことに限定されません。現場に立った者の情報に、彼らの経験に耳を傾けること、それも含めて、「植民地経験」を捉えたいと思います。それをこれまでの帝国像と考え合わせることで、われわれには新たな帝国の姿が見えてくるのではないのでしょうか。

資料① メアリ・キングズリ略歴

1662	ロンドン生まれ (父 George は貴族の主治医)
1892	両親の死亡
1893	(~1994) 一度目の西アフリカの旅
1894	(~1995) 二度目の西アフリカの旅
	1897 <i>Travels in West Africa</i>
1898	シエラレオネ小量税反乱
	1899 <i>West African Studies</i>
	1900 <i>Notes on Sport and Leisure</i>
1900	南アフリカ、シモンスタウンにて死亡 (6.3.)

資料② アリス・グリーン略歴

1847	アイルランド、ケルズ(Co. Meath)生まれ (父はミース大牧師)
1843頃	失明状態 (~1870頃 回復)
1874	父の死でチェスターへ転居
1877	J.R. Green と結婚
1883	夫の死 → サロンを開く
	ロンドン、ケンジントン・スクエア 14番地
	1888 <i>Henry II</i>
	1891 <i>A Short History of English People</i>
	(Illustrated edition)
	1894 <i>Town Life in the Fifteenth Century</i>
1900	アフリカ協会設立準備 (1901.6 設立)
	セント・ヘレナ島ポア人 POW 訪問
1903	転居
	ロンドン、グロヴナ・ロード 36番地
	1908 <i>The Making of Ireland and Its Undoing, 1200-1600</i>
	1911 <i>Irish Nationality</i>
	1912 <i>The Old Irish World</i>
1914	アイルランド義勇軍設立資金調達ロンドン支店
1916	イースター蜂起 / ロジャー・ケイスメント初命喪運動 (8.3 処刑)
1918	転居 ダブリン、セント・スティーヴンス・グリーン 90番地
1922	アイルランド自由国国会議員指名
1929	アイルランドの自宅で死亡

では、二人の女性、メアリ・キングズリとアリス・グリーン「植民地経験」とそのゆくえを考える意味はどこにあるのでしょうか。つぎにこれについて考えていきましょう。

<メアリとアリス、女の友情の意味>

本日の主人公たちは深い信頼関係で結ばれていましたが、二人が友情を育んだ時間はさほど長くはありません。資料①②の二人の人生を見てください。

メアリ・キングズリは1862年に生まれ、1892年に両親を亡くし、その翌年、1893年に一度目の旅に、そして1894年末から95年にかけて二度目の西アフリカの旅に出ています。その後、1900年3月、突如南アフリカ戦争の戦場に看護婦を志願してイギリスを去り、ケープタウンの少し南にあるシモンズタウンという町でボーア人捕虜を介護中、腸チフスに感染して手術の甲斐なく、同年6月3日、37歳で亡くなりました。

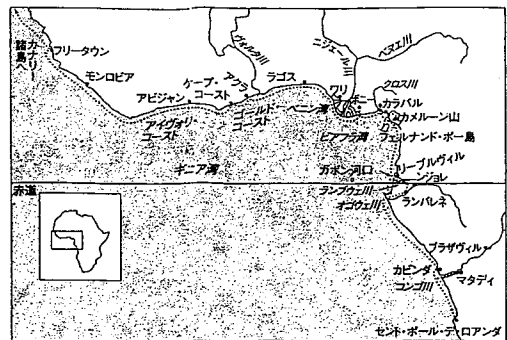
一方、アリス・グリーンがメアリ・キングズリと出会ったのは、メアリ・キングズリが処女作、『西アフリカの旅 (Travels in West Africa)』を上梓した1897年早々のことでありました。その後、1900年6月にメアリが亡くなった後、アリス・グリーンは彼女の植民地経験を受け継ぐかのように、メアリの影響を色濃く受けた諸活動に着手していったのです。資料②にあるように、アリス・グリーンは、1900年7月、メアリ・キングズリ追悼を目的にアフリカ協会設立準備委員会を立ち上げ、翌年「アフリカ協会 (現在の王立アフリカ協会)」を創設しました。そして、その2ヵ月後には、アリスはメアリの「経験」を追いかけ、南アフリカ戦争中のセント・ヘレナ島に渡ったのです。

南アフリカでのメアリの突然の死、その後のアリスの行動——それは「女の友情」の成せる技だったのでしょうか。では、戦争中の南アフリカにまで足を運ばせてしまう「女の友情」とは、いったいどのようなものだったのでしょうか。人の死の意味を問うこと、それは生の意味を問うことでもあります。なぜメアリは死ななければならなかったのか、それを問うことは、彼女がどうやって生きてきたかを問い直す作業でもあります。そのために、アリス・グリーンは陸軍省にかけあって許可を得て、セント・ヘレナ島のボーア人捕虜収容所への立ち入りを許された唯一の民間人、となりました。そういう「女の友情」とはいったい何なのでしょう。

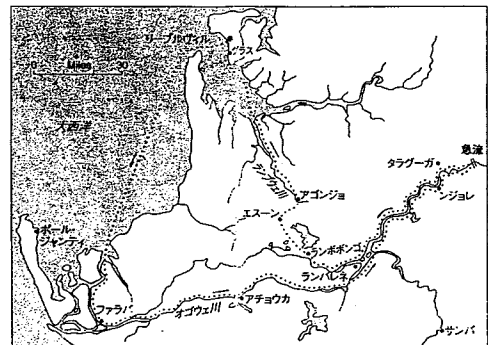
「友情」自体は個人的、私的なものかもしれませんが。しかしながら、メアリとアリスの友情は、南アフリカ戦争という公的な場と、そこで展開された「帝国の大きな物語」と、確実につながっていたのです。われわれの周辺でおこる、それ自身はプライベートで小さな物語が、世界でおこっているパブリックなもっと大きな問題としっかり結びついているように……。では、アリス・グリーンはメアリ・キングズリのどのような「植民地経験」を、どのように受け継ぎ、それをどのようにどこに (あるいは誰に) 伝えようとしたのでしょうか。あるいは、メアリの経験を追いかけて南アフリカ戦争の捕虜収容所に足を運んだアリス・グリーン自身の南アフリカ経験とはどのようなものだったのでしょうか。彼女のアフリカ経験は、イギリス、あるいは彼女の故郷であるアイルランドの何をどう変えたのでしょうか。それがここ数年の私の関心事です。小さなディテールが大きな枠組みをどのようにつき動かしていくか、それをさまざまな史料——膨大な手紙群や日記に探る作業はほんとうに楽しいものでした。その成果のいくつかを、今から皆さまにお話したいと思います。

<受け継がれた経験

——メアリ・キングズリの西アフリカの旅>



地図① メアリ・キングズリの旅ルート (1893, 1895年) (Birckett 1992: 扉頁)



地図② メアリ・キングズリの旅ルート (1895年) オゴフェ川下流域付近の拡大図

アリス・グリーンは、メアリ・キングズリから具体的にどのような「経験」を継承したのでしょうか。その前に、アリスとはどういう女性だったのでしょうか。

アリス・グリーンの夫、J. R. グリーンは、『イングランド国民小史 (A Short History of English People)』(1874年初版)で知られるイングランド史家でした。「小史」といいますが、非常にぶ厚い本です。日本の旧制高校でも歴史の教科書として使われていたと聞きます。イギリスでは、1874年の初版以来、1920年代までずっと再版を重ねながら、歴史教科書として使われてきました。特に成人教育の場で使われたといえます。1883年春、病弱だった夫の死で未亡人となって以後も、アリス・グリーンは、夫の著作権でミドルクラスとしての生活の体面を保つと同時に、ケンジントン・スクエア14番地の自宅でサロンを主宰し、さまざまなゲストたちを引き合わせ、結びつける役割に生きがいを見出すようになっていきます。

『国民人名辞典』には、彼女のことが「ロンドン有数のサロンの女主人」と紹介されています。夫と交流のあった歴史家、ジャーナリスト、あるいは自由党の政治家らが、彼女のサロンのゲストとなりました。そのなかには、若き日のウィンストン・チャーチルや、第一次世界大戦時の首相であるハーバート・アスキス、外務大臣のエドワード・グレイの姿もありました。ここにメアリ・キングズリが姿を見せるようになったのは、先ほど申しましたように、1897年1月早々、メアリ・キングズリが処女作『西アフリカの旅』を出版した直後のことでした。当時の彼女は、この旅によって、西アフリカの専門家として一躍脚光を浴びつつありました。

お手元の地図を見ながら、メアリ・キングズリの旅がどのようなものだったか、ご紹介しましょう。イングランド北部の港町リヴァプールを貨物船で(「白人の墓場」と呼ばれていた西アフリカに向かう客船など、当時はありませんでした)出航したメアリ・キングズリがまずたどりついたのは、西アフリカ貿易の拠点のひとつである解放奴隷の町、シエラレオネのフリータウン——ごく最近まで内戦がつづき、今なお情勢不安定で知られる場所——でした。1893年秋から94年1月にかけての旅では、ここから沿岸部を旅して南下し、サン・パウロ・デ・ロアンダ(現在のルアンダ)まで足をのびした後、北上して同じルートをたどって帰国しました。この一回目

の旅は、いわば下見でした。

二回目の旅は、1894年のクリスマスから1895年11月30日に帰国するまで、1年近くをかけ、地図②にある西アフリカ第二の大河、オゴウェ川を遡り、冒頭に見たランバレネの先、ランブウェ川へつづく陸路を行っています。このルートは当時、白人未踏の地でありました。地図なき道を、メアリは、自力でカヌーを漕いで川を遡り、ぬかるんだ道を徒歩で旅したのです。しかも、このとき彼女と旅をともにしたのは、当時のヨーロッパで人喰い(カニヴァリズム)で知られていたファンという部族でした。『西アフリカの旅』に写真とともに何度も登場するファン族との関係が、帰国後のメアリを一気に有名にしたといえます。白人未踏の旅はわずか数日間でしたが、「人喰いのファン族」とともに過ごしたこの数日間こそ、その後、彼女が亡くなるまで、メアリのイメージ——「人喰い」と旅した勇敢なイギリス人レディ——を固定することになりました。

では、メアリ自身にとって、ファン族との旅を含み、西アフリカでの経験は、どのような意味を持ったのでしょうか。彼女にとって西アフリカとは何だったのでしょうか。

それを解くひとつの鍵は、資料④にあげたメアリの手紙にあるように思われます。これは、物資や兵士を運んで南アフリカに向かう軍艦ムーア号の船上で、看護婦を志願してケープタウンに向かっていたメアリ・キングズリが、リベリアの首都モンロビアで発刊された雑誌、『ニュー・アフリカ』の現地人編集者に宛てて書いたものであり、メアリの死後、彼女の二冊目の著作『西アフリカ研究』(1899年初版)の第二版(1901年)の序文に全文掲載されたものです。メアリの手紙からは、一九世紀末にもなると、キリスト教のミッション教育を受け、英語を流暢に話し、ヨーロッパ人と渡り合える知識を持った現地人が多く育っていたことがわかります。たとえば、シエラレオネの首都フリータウンには19世紀前半に大学(フォーラーベイ・カレッジ)が設立され、そこからイングランドやスコットランドの大学に留学するアフリカ人も少なくありませんでした。そうした高等教育を受けた現地人が自分たちの情報を自分たちで発信する方法が、新聞や雑誌の創刊でした。メアリ・キングズリは、西アフリカ経験を通じて、独自のメディアを持ちはじめた彼ら現地人エリートたち、商人や知識人らとの間にネットワークを築きつつあったと思われます。

Monday, October 8.

資料6

Went down from Government House just in time to see the new batch of prisoners land. I spoke to a Canadian soldier guarding them who said Roberts wanted them to stay, but they had had enough of it and wanted to go back to their employments. Besides they did not get food enough - 1 lb of meat (I think it was 1/4 or 1/2 lb he said) and 1/2 lb of bread, and coffee was not enough to march 25 miles a day on. He

メアリの手紙を見てみましょう。彼女はアフリカ人編集者にこう訴えています。

「あなたがたにはできます。アフリカにはアフリカの法と文化があると、アフリカ人には自分自身の制度と国家形態があると、そう主張すればいいのです。それをうまくやれば、イギリスは、とにもかくにも、これまで故意にではなく無知ゆえにアイルランド人にしてきたようなこと——アフリカのナショナリティを破壊したり、彼らに苦悩を与えたりしたいなどとは思わないと私は信じます。アイルランドの古きブレホン法を調べてみれば、そこには、あなたがたがアフリカに有する土地法と同じ形を見出すでしょう。イギリス人がこの法の存在を知って、わずか50年ほどにしかありません。もしエリザベス朝時代にこの法の存在を知っていたら、今のアイルランド土地問題などなかったでしょうに。

あなたがたには、チャンスがあります。神はアイルランドの悲劇を繰り返さない方法を教えてくれる、そんな機会をいつも与えてくれるのです。それも手遅れにならないうちに——。」

ここに、メアリ・キングズリがその短い人生で何度も繰り返した言葉を認めることができます。「アフリカにはヨーロッパとは異なるアフリカ独自の文化や制度、そして法がある。あなたがたアフリカ人は、そう言えばいいのです。」——この主張は、開発をめぐる現在の問題とも関係しています。植民地時代、イギリスはアフリカの沿岸部から内陸部に向けて鉄道を敷き、学校を作り、森林を伐採するなど、環境にさまざまな手を加えました。メアリは、それが果たしてアフリカ人にとっていいことなのか、試行錯誤しています。また、たとえばメアリが旅した地域のアフリカ人たちは一夫多妻制をとっていたのですが、それは「文明化」を進める宣教師たちが教えようとしていたキリスト教のモラルに照らせば、否

定すべきことでしかありません。しかしながら、アフリカの気候・風土を考えれば、それ以上に、妻たちが互いに協力しあって自分たちの時間を作り出し、それぞれの人生を豊かに生きているかに見える様子から、メアリ・キングズリは、イギリスがおこなう「文明化」は、現地の文脈においてこそ評価・批判されるべきだと主張したのです。それは、今でこそ当たり前の考え方もかもしれませんが、19世紀末においてはきわめて斬新、かつ大胆な発言でした。とりわけ、メアリが強調したのは、キリスト教が説くモラルをアフリカに押しつけてはならないということでした。

資料③、オゴウェ川の描写をめぐるシュヴァイツァー博士とメアリの違いからも、メアリのアフリカ観を抽出することができます。二人とも同じ川を遡るのですが、シュヴァイツァーは、『水と原始林のあいだ』というエッセイの中で、この川についてつぎのように書いています。

「どこかで想像図として見たことのある太古の風景が目目の当たりにある。どこまでが河で、どこからが岸なのか見分けがつかない。・・・刻一刻と時が過ぎていくが、あたりは変わらない。あらゆる曲がり角、あらゆる隅が似通っている。いつまでも同じ森、同じ黄色い水。単調さがこの自然の威力を途方もなく強める」(浅井真男訳『シュヴァイツァー著作集』第1巻、白水社、1956年、34頁)

オゴウェ川の単調さばかりが印象づけられたシュヴァイツァーとは異なり、メアリ・キングズリが同じ河を描写するところとなります。

「生命力と美にあふれ、まるでベートーヴェンのシンフォニーのようである。パートが代わり、音符が絡み合い、そしてまた元の旋律に戻るのである。豊かに繁茂する熱帯の美を期待していたのだが、この光景はその期待をはるかに超えていた。オゴウェの森はクレオパトラ。それに比べて、カラバル(沿岸部の貿易拠点で、当時すでにかなりヨーロッパ化した町で、多くのヨーロッパ人が住んでいました)はただのキューカーだ。」

「ベートーヴェンのシンフォニー」「クレオパトラ」といったヨーロッパ人にわかりやすい比喩。さらには、オゴウェ川の岸辺近くの森にかかる霧は、「美しい女性の顔に繊細なヴェールをかぶせた時の感じと似ている」という表現。そこには、西アフリカという未知の地を、イギリス人に理解できるように再現したいと思うメアリの願いが見えるでしょう。

いやむしろ、彼女は、西アフリカの風景を忠実に再現していたのではなく、ヨーロッパ人に理解できるような風景に現実の風景を作り変えてしまった、といった方がいいかもしれません。西アフリカに実際に行ったことのないイギリス人（広くはヨーロッパ人）に、その「現実」が想像できるはずもないでしょう。それを彼らが想像できるように、しかも楽しいものとして作り直していく。シュヴァイツァーが単調さを感じたオゴウェ川に、ベートーヴェンのシンフォニーにも似た旋律を見つけてしまう——メアリ・キングズリにとって「アフリカ」とは、そういう場であったのです。

同じことは、人喰いといわれたファン族の表現にも見られます。メアリは彼らを賛美しながらこう言っています。

「ファン族とイギリス人はよく似ている。われわれには、相違点を探すよりも、類似点を探す方がずっと似合っている。」

彼女の西アフリカの旅の記録は、どこを読もうと、男性の探検家や旅人、あるいは宣教師らの物語でおなじみの「野蛮さ」、血なまぐさい殺し合いなどの話はありません。あるのは、ひとりのちょっと風変わりなイギリス人女性が、不思議な魅力に満ちた異文化と触れあった、そんな物語なのです。そこには、彼女が繰り返し主張するようになる、「アフリカにはアフリカの文化がある」という確信が織り込まれているように思われます。

また、男性の書いた「アフリカの物語」では、現地の人びとが固有名詞で登場することはほとんどありません。その典型が、ジョゼフ・コンラッドの小説、『闇の奥』（1899）でしょう。彼らは、「アフリカ人」という言葉で一枚岩的に語られることが多いように思われます。ところが、メアリ・キングズリはできるかぎり現地の固有名詞を用い、彼女に聞き取りにくい名前の場合には、彼女の印象で命名してしまうのです。たとえば、 그레이のシャツを着ていたら「グレイ・シャツ」、ムスリムのような異教の雰囲気漂わす人物は「ペイガン (pagan=異教徒)」と、彼女が名前をつけてしまうのです。この点で、彼女の語る「アフリカ物語」は、それ以前に男性探検家や宣教師が綴ったアフリカ物語と大きく違っていました。そしてイギリス人は、そんな彼女の物語を広く受け入れ、さらにフランス語、ドイツ語、スペイン語などに翻訳されて、アフリカ経験を綴った「メアリ・キングズリの物語」は、広くヨーロッパ

じゅうで読まれたのです。それは、彼女が「生産」した西アフリカの風景や民族が、広くヨーロッパで受容され、「消費」されたことを意味しています。

<アリス・グリーンサロン>

メアリ・キングズリの語るアフリカ経験を「消費」した場所、そのひとつが、アリス・グリーン自宅サロンでした。ここで、メアリを追悼するアソシエーション、アフリカ協会が発足したことはすでに述べたとおりです。サロンのあったケンジントン・スクエア14番地は、地下鉄ハイ・ストリート・ケンジントン駅の近くですが、近くを走るハイ・ストリートの喧騒が嘘のように静かな住宅地です。スクエアになっているここには、19世紀の文化人が多く暮らしていたことがわかっています。この自宅サロンでの活動は、彼女の手紙や日記などから、かなり忠実に再現することが可能です。先ほどもあげましたが、自由党のアスキス首相、グレイ外務大臣、第一次世界大戦時の陸軍大臣ホルデン。来日したこともあるフェビアン社会主義者のシドニー、ベアトリスのウェッブ夫妻。その他ジャーナリストや作家らがアリス・グリーン自宅に自由に出入りし、食事をしたり会話を楽しんだりしていたと思われます。とりわけ、大物政治家グラッドストンの後継者問題とともに、福祉国家への転換が図られていく当時において、何が「自由放任主義」に代わるスローガンとなりうるかなど、党の再編を模索する自由党議員たちに、アリス・グリーン自宅サロンは、試行錯誤の場を提供していたといっていでしょう。政治を動かす場が議場だけではないことは、今も昔も変わりません。

<南アフリカ戦争を捕虜収容所からながめる>

さて、レジュメにある資料⑤を見てください。

資料⑤ 南アフリカ戦争（第二次ボーア戦争）の経過

- 1869 キンバリーでダイヤモンド鉱発見（南アフリカの星 83.5 カラット）
- 1880.10～81.8 第一次ボーア戦争
- 1886 ヨハネスブルグ近郊で金鉱発見
- 1895.12 ジェイムスン侵入事件（イギリスによる国境侵犯）
- 1899.5 プルムフォンテイン会談決裂
- 10.11 第二次ボーア戦争勃発/ 12.10～15. ブラック・ウィーク
- 1900.1. 総司令官ロバートス陸軍元帥、参謀長キッチナー男爵着任
- 2. パーグベルクの戦い（ボーア軍初の大敗） イギリス軍の反撃開始
- 捕虜収容所の拡大 ベルビュー・キャンプ設置
- 3. グリーン・ポイント・キャンプ/ ベルビュー、パンク状態
- 3.28. メアリ・キングズリ、ケープタウン到着
- 4.15. セント・ヘレナ島、デッドウッド・キャンプの設置
- 8. セイロン島に収容所設置（その後さらにパーミュエド島に収容所設置）
- ボーア人のゲリラ戦、報復としてイギリス軍黒土作戦・女性と子どもを強制収容所送
- 1902.5.31. 和平米約締結

これは、1899～1902年に行われた南アフリカ戦争（第二次ボーア戦争）の年譜です。まずはダイヤモンドが、その後金鉱が発見されたことで、それまで看過されてきた二つのボーア人国家は欧米からいっせいに熱い視線を集めることになったのです。1899年10月11日に勃発した戦争の2ヶ月後、12月10日～15日にはイギリス軍から大量の死者を出し、「暗黒の一週間（Black Week）」と呼ばれて、イギリス世論を大いに揺さぶりました。

南アフリカ戦争時代、イギリスには徴兵制がありません。ですから、当時の軍隊は志願兵、義勇軍で構成されていました。兵士たちは「クリスマスまでには帰ってくるよ」と家族や恋人、友人たちに言い残し、10月にはじまる戦争に向かったのです。しかしけっきょく、戦争は、1899年のクリスマスが来ても終わりませんでした。それどころか、1900年、1901年とクリスマスが3回も過ぎて終わらなかったのです。戦争の長期化は、戦争捕虜の問題を深刻化させます。南アフリカ、ケープタウンにメアリ・キングズリが上陸したのは、当初現地の地理に熟知していたことから優勢を保っていたボーア軍が、援軍の到着で盛り返すイギリス軍に対して劣勢に追い込まれはじめた時期とぴったり重なります。

南アフリカ戦争のひとつの転換点は、1900年2月27日、パーダベルクの戦いにおけるボーア軍の敗北でした。この戦いを期に、イギリス軍は、総司令官にアフガン戦争の英雄で陸軍元帥のロバーツ卿を、参謀長としてキッチナー男爵を送り込み、巻き返しを開始します。1900年3月半ば、イギリスを後にしたメアリ・キングズリを死に追いやったのは、パーダベルクの戦いで出た大量のボーア人捕虜が塹壕のなかで罹患した腸チフスでした。塹壕戦は、その後、第一次、第二次世界大戦へと受け継がれる戦略がありますが、そのルーツは二〇世紀最初の戦いとなった南アフリカ戦争に認めることができるのです。

こうして、メアリ・キングズリは、文字通り、南アフリカ戦争における最初の大きな転換点に行き合わせることになりました。と同時に、彼女の死は、長期化の様相を呈しはじめたこの戦争において、増加の一途をたどりはじめたボーア人捕虜をどこにどのように収容するかという新たな問題が深刻化した証拠でもありました。

優勢を回復したイギリス軍は、劣勢に陥ったボーア軍がとりはじめた新たな戦略、ゲリラ戦への報復として、二つの非人道的な戦略に着手します。ボー

ア人の農場を焼き尽くす焦土作戦、そして、非戦闘員であるボーア人の女性や子供を捕虜として強制収容所に送還することです。前者の作戦は、ボーア人の怒りを誘発し、ゲリラ戦はますます激しさを増すこととなります。また後者についてですが、私は、このときの強制収容所（英語で concentration camp）が、ナチス・ドイツが虐殺（ホロコースト）のためにユダヤ人を送り込んだ収容所のルーツだと考えています。実際、ボーア戦争の強制収容所における女性と子供の死亡率は、不衛生で疫病が頻繁に発生したために、非常に高いものでした。その意味でも、南アフリカ戦争は、二〇世紀の戦争の先駆的存在と考えていいと思われます。

話を元に戻しましょう。

問題は、増えつづける捕虜をどうするか、です。当初は、シモンズタウンに設けられた捕虜収容所で処理できると思われていましたが、パーダベルクの戦い以後、南アフリカ本土には収まりきれず、大英帝国のさまざまな地域にボーア人捕虜を収容する施設が次々と作られていきます。すでに戦闘員としては、インドやカナダ、オーストラリアといった植民地から多くの兵士がやってきていましたが、捕虜収容所設置に関しても、ボーア戦争ははっきりと「帝国の戦争」だったといえるのです。

南アフリカ本土以外に最初に設置された海外収容所、それが、セント・ヘレナ島のデッドウッド・キャンプでした。ここには、パワーポイントの写真からもわかるように、三角形のテントひとつに10～12人ほどの捕虜が詰め込まれたと記録されています。やはり非常に不衛生な空間だったようです。

ここに、アリス・グリーンは、メアリ・キングズリの死の意味を求めて訪れます。メアリが死の直前まで介護にあたったボーア人捕虜が、腸チフスを彼女に感染させることになる捕虜たちが、シモンズタウンからセント・ヘレナ島に移送されたという情報を得たからです。自宅サロンのコネクションをたどり、セント・ヘレナ島の捕虜収容所への立ち入りを許可されたアリス・グリーンは、紹介されたボーア人捕虜に、こう問いかけています。「どなたか、シモンズタウンでメアリ・キングズリとごいっしょだった人はいませんか」——運の悪いことに、メアリが介護した捕虜は、タッチの差で、セイロン島に設けられた新しい収容所に再移送された後でした。この事実自体、ボーア側で捕虜が増大していた証しでありましょう。捕虜の問題は、最近のイラク戦争でも

問題視された、戦争につきまとう大きな問題です。アリス・グリーンがメアリ・キングズリの経験を追いかけてボーア人捕虜収容所にたどり着いたこと、そして、ボーア人捕虜収容所という場所から戦争を眺め、そこからこの戦争の意味を考えざるをえなくなったことは、その後のアリス・グリーンの戦争観に大きな影響をもたらしたと思われます。イギリス軍の傷病兵が収容された病院に派遣されていたならばおそらく見えなかったこと、経験しなかったことを、アリスはここで経験したと考えられるのです。

アリス・グリーンは、メアリ・キングズリを知る捕虜がセイロン島に移されたことを知ってショックを受けますが、まもなく気をとり直し、「なぜメアリ・キングズリは死ななければならなかったのか。メアリが死ななければならなかった戦争とは何なのか」を知るべく、捕虜たちへのインタビューを開始します。それが300頁を超す長い日誌となって残っています。資料⑥はその一部です。

日誌のなかで、アリス・グリーンは、捕虜収容所という空間に「戦後の南アフリカ」を覗んでつぎのように述べています。捕虜収容所は何か罪を犯した人が入るところだと考えてはならない。捕虜収容所は、ボーア人たちがイギリスの支配とはどういうものか、イギリス人がどういう民族かを初めて知る場として捉えなければならぬ——。帰国後のアリス・グリーンは、それを雑誌論文や新聞記事に記すとともに、捕虜の待遇改善を陸軍省に訴えていきます。捕虜収容所は、何よりもまず、自分たちと戦い、自分たちを捕虜にした敵を知る場なのだという見方は、イラク人捕虜に対するアメリカ軍、イギリス軍による虐待に対する批判とも受けとれる助言でありましょう。仮にアメリカ軍が、戦後イラクを展望して、イラク人がアメリカとはどういう国なのか、アメリカ人とはどういう人たちなのかを初めて経験する場として「収容所」とそこに付随する問題を捉えていたならば、あのようなスキャンダラスな問題はおきなかったでしょう。その意味でも、捕虜収容所の問題がクローズアップされた南アフリカ戦争は、今に続く二〇世紀の戦争のルーツであったといえるのです。それゆえに、当時の南アフリカにおける捕虜収容所問題が当時の日本とどのようにつながっていたのか、明治日本の戦争と南アフリカ戦争はどのように関連しあっていたかについては、今後さらに検討を重ねたいと思っています。

もうひとつ、アリス・グリーンがこの捕虜収容所

のインタビューを通じてつかんだある事実について、話しておかねばなりません。それは、彼女の日記に書かれた「南アフリカはアイルランドと同じである」という言葉に集約されています。

アリス・グリーンは、プロテスタントのアイルランド人、すなわち、17世紀半ば、クロムウェルの命令でアイルランドに移住したイングランド人の子孫です。そうした人びとをアングロ・アイリッシュ、といいます。ところが彼女は、ロンドンに暮らす間は、自分が人種、民族的に何者であるかということに関して、ほとんど意識していなかったように思われます。それにまつわるエピソードはいくつかありますが、たとえば、夫 J. R. グリーンが、アイルランド生まれでアイルランド教会の聖職者の娘でもあった彼女に、アイルランドの宗教状況について質問したところ、アリスは「私には関心がない」とだけ答えて、夫をびっくりさせたといいます。オクスフォード大学ジーザス・カレッジに残る J・R・グリーンの手紙が記録している話です。それは、それまでのアリスが、自分の民族性を考えなくてもいい幸せな環境にあったからでしょう。

ところが、南アフリカでボーア人捕虜に対して聞き取り調査を続けるなかで、アリス・グリーンは、民族として自分がどこに属しているのかを考えざるをえなくなったといえます。当時の南アフリカでは、ようやく「国民 (nation)」が創られつつありました。ボーア人たちの間に「国民」としての意識が芽生えはじめていたのです。その様子を目の当たりにしたアリス・グリーンが残した言葉——それが、「南アフリカは、イギリス支配に苦しめられてきたアイルランドと同じである」という言葉だったのです。

注目すべきは、この戦争にアイルランドから500名を超える義勇兵が加わっていた事実です。彼らはもちろん、反イギリスの立場でボーア軍の一員として戦っていました。その一方で、イギリス軍には大量のアイルランド人の将校が、兵士が、いたのです。しかも、イギリス軍におけるアイルランド人兵士の死亡率は、イングランド人よりも高かったことが記録として残されています。すなわち、南アフリカ戦争の戦場において、アイルランド人は、片やイギリス軍の一部として、片やボーア軍の義勇兵として、互いに対峙していたこととなります。ここに、アリス・グリーンは、アイルランド人のもうひとつの悲劇を見たといっていいいでしょう。彼女が「自分は一

体何者なのか」を真剣に考えざるをえなかったのも、こうした状況においてでありました。当時アイルランド人と同じ立場にあったのが、南アフリカの黒人たちでしたが、黒人について、アリスがじゅうぶんに議論を展開していたようには思われません。彼女にしてみれば、南アフリカで「発見」したアイルランド人意識こそが重要だったのでしょう。

<アイルランド史を書き換える>

南アフリカで「発見」した自らのアイルランド人意識を、アリス・グリーンは帰国後、アイルランド国民の物語、すなわちアイルランド史の書き換え作業のなかでさらに発展させていきます。南アフリカを経験して以後のアリス・グリーンは著作をごらんください(資料②)。『アイルランドの形成と解体』(1908年)にはじまる一連のアイルランド史の著作は、それまでイングランド史家であった夫の叙述や歴史認識を継承してきた彼女が、その関心を大きく変えたことをはっきりと物語ってくれます。と同時に、アリス・グリーンは、「自治か分離独立か」「君主制か共和制か」で揺れていたアイルランド問題へとより深く関与していくことになるのです。

さて、パワーポイントの写真にあるここが、ケンジントン・スクエア14番地から転居したアリスの新しい住居です。グロヴナ・ロード36番地——南アフリカから帰国してまもなく、アリスが定めた居には、ジャーナリストのE・D・モレルや外交官のロジャー・ケイスマント、アイルランド詩人のパトリック・コランやアイルランド中世史家のエオン・マクニールらが主なゲストとして集いました。モレルとケイスマントは、ベルギー王の私有地であったコンゴ自由国奥地で展開されていた現地人への残虐行為を告発した人物です。すなわち、この新しい住居で展開されたサロンには、アフリカへの関心とアイルランドに対する関心が入り混じっていたといえます。しかもそこは、きわめて政治色が濃いサロンでもありました。それが、幅広い興味をもつゲストを集めたケンジントン・スクエア14番地との大きな違いだといえます。サロンの女主人の関心の変化が、サロンの性格を大きく変えたのです。

ここにおこったのが、アイルランド史の大きな節目となる1916年のイースター蜂起でした。アリス・グリーンはサロンのゲストであり、アリスを姉とも母とも慕っていたロジャー・ケイスマントは、この事件との関連を問われ、イギリスに対する国家反逆

罪で処刑されます。彼の処刑をなんとかして食い止めようと奔走したアリス・グリーンは実りませんでした。その後まもなく、アリスはイギリスを去ってアイルランド、ダブリンに転居し、そこでまた「別の物語」が展開されることとなりますが、それは次の機会にお話しすることにしませう。

<むすびにかえて>

——なぜアリスに「会えた」のか>

最後に多少結論めいたこととお話ししなければなりません。今日みなさんにお伝えしたかったのは、冒頭で申しましたように、「帝国」とは何か、何だったのかを考えるには、本国イギリスが植民地に何をしたのかではなく、むしろ、植民地を訪れた人たちがどのような「植民地経験」を持って本国に戻ってきたのか、その経験がその人をどのように変え、さらにその人物が戻ることでその人物の周囲を、ひいてはイギリス(あるいはアイルランド)をどのように変えていったのかというように、帝国—植民地間のベクトルを逆転させる必要がある、という問題提起でした。その具体的な中身についてはお話ししたとおりです。

現在、冷戦体制崩壊後の世界が「帝国」という言葉をキーワードに読み直されている状況のなかで、われわれに求められているのは、「帝国の物語」の再生産ではなく、ベクトルを逆転させて「植民地(周縁)の物語」に耳を傾けることだといえます。言い換えれば、帝国という大きな物語のなかで隠蔽され、われわれの眼に見えなくなっているものがないか、それを考えてみる必要があるということです。

もうひとつ、お話しさせていただきます。それは、本日お話ししたアリス・グリーンという女性と私がどうして「会う」ことができたのか、という問題です。

私は、1998年から99年にかけて、ロンドン大学歴史学研究所の客員研究員として、1年間ロンドンに滞在しました。当時知り合ったイギリス人の友人に、「アリス・グリーンという人物を調べている」と話すと、みな様に「彼女は何者だ」と聞きます。そこで「歴史家J・R グリーンの未亡人だ」と答えると、「そうなの」というだけで、そこで多くの場合、会話が途切れてしまったのです。アリス・グリーンの記憶は、もはやイギリス史やアイルランド史から忘却されてしまっていたのですね。ですから、もし私がイギリス史、あるいはアイルランド史だけを見ていたら、あるいはこの二つの国の関係史にしか関

心がなかったならば、私は、アリス・グリーンという人物に「会う」ことができたかどうか、わかりません。

私がアリス・グリーンに「会った」のは、西アフリカを旅したメアリ・キングズリの周辺を探っているときでした。そこに浮上してきたのが、「ケンジントン・スクエア14番地」という住所だったのです。当初は人びとが集う会館のような公共施設があるのだろうと思っていたのですが、調べてみると、そこは個人の自宅であり、ロンドン有数として知られたサロンだったことがわかりました。その中心にいたのがアリス・グリーン——当時の私には未知の人物でした。

このように、イギリス、アイルランドという二国ではなく、植民地アフリカを経由しなければ、忘却の彼方からアリス・グリーンを再び記憶の世界に取り戻すことはできなかったのです。すなわち、思いもかけない場所や時間、出来事などを重ねあわせることで見えてくるものがあること、そういう「合わせ鏡」のような可能性をアフリカという地域が持っていること、それを実感したのもアリス・グリーン発掘のプロセスにおいてでした。そして、こうした「発見」「発掘」そのものが、私にとって、とても楽しい時間であったのです。

長い間話におつきあいくださり、本当にありがとうございました。

<以上は2004年7月2日（金）甲南大学甲友会館にて開催された公演に基づく>

平成15年度研究チーム活動中間報告

「ミッション・ネットワークと帝国」

NO. 84 井野瀬久美恵（文学部）

二年目に入った本共同研究は、「大英帝国と宗教」（2001～2002年度）を継承し、18世紀末以降、イギリス国内で続々と設立されたミッション団体が、領土を拡大していく帝国とともに、時には帝国拡大を先導するかのごとく、7つの海、5つの大陸に広げたネットワークをあぶり出し、その意味を歴史的、現代的に問い直すことを目的としている。前回の共同研究で採用した手法を踏襲して、昨年度2003年度は、2ヶ月に一度の割合で研究会を開き、人類学や宗教学、哲学、文学、歴史学など、学外から専門家を招いてミッション・ネットワークに絡む諸問題を多角的にあぶり出すことを試みてきた。

本年度も11月までは同様の手法で研究会をおこなってきた。もちろん、お招きした専門家すべてがこのテーマに関心をもって研究してきたわけではない。それはわれわれ共同研究のメンバーも同様である。むしろ、それぞれの研究テーマに本共同研究のテーマである「ミッション・ネットワークと帝国」を重ねあわせてみると、それぞれの研究の中身が、そしてわれわれの共同研究テーマがどんな見え方になるのか、それを楽しんできたというほうが正確であろう。なお、本年度は、共同研究のメンバーに次のような関心を共有してくれるよう、よびかけた。すなわち、「9. 11」以降、世界がいとむたやすく、宗教対立＝文明の衝突、に還元して語られることへの疑念、である。こうした単純な見方が強く提唱されているように見えるのはなぜか。そこにアメリカを「帝国」として読み解く国際情勢、そのなかで意味を大きく変えていった「帝国」という概念を加えるとどうなるのか。そのなかで、かつて欧米の多様なミッション団体によって確立された宗教のネットワークはどのような役割を果たしているのか。こうした点に配慮した報告書ができればと、今は強く願っている。

なお、本年度開催した研究例会を以下に紹介しておきたい。

5月16日（日）甲南大学第二会議室

報告者 藤原辰史氏（京都大学人文研助手）

「ナチス・ドイツの有機農法：「自然との共生」はなぜ「民族の抹殺」に加担したのか」

7月11日（日）甲南大学第二会議室

高田 実氏（九州国際大学教授）

「歴史のなかの帝国とアイデンティティ：ミッションたちは何を残したのか？」

9月17日（日）甲南大学5号館409室

白井堯子氏（慶應義塾大学福沢研究センター客員所員）

「福沢諭吉と宣教師たち——明治期、もうひとつの日英関係」

11月7日（日）京都大学人文科学研究所西館会議室

（甲南大学が学園祭のため、会議場所を移動しました）

4年間の研究成果をどのように本にまとめるかについて出版社編集者とともに議論した。その結果、帝国史研究シリーズの一部として公刊することが提案されたが、いまなお、その詳細については出版社と交渉中である。

本プロジェクト・チームは、日本・中国という大国からの視点で三国の交流を見るのではない。15世紀からその国の姿を琉球王国として東シナ海に現した琉球弧を中心に民間交流を考察してみようとするのである。王統の流れを中心とする日中関係での政治や文化の概要は明白になりつつあるとはいえ、琉球弧の島嶼や島民レベルでの庶民の文化や生活に関しては解明されているとは言い難い。その点に留意した本研究は、平成15年4月から12月の間、4回（神戸2回、沖縄2回）の研究会を開催した。本年16年は1月から10月までの間（神戸2回、沖縄1回）の3回開催した。また本年は「甲南大学公開講座春季講座」の要請を受けて、「境界をこえる人・物・情報～日中琉の民間文化交流～」と題して5月から6月の土曜日（六回）に研究成果の一端を公開講演した。

各々研究メンバー6人が六回にわたって行い、それぞれ好評を博し担当の分野で成果を収めた。

次にその後の研究の中間報告を以下記す。

まず高阪薫の「琉球弧島嶼間みる媽祖信仰・伝承の問題～久米島『天后宮』の由来と沖縄祭祀との関連性」の研究は、中国から伝わった媽祖信仰に関わる拙論「久米島・天后宮由来に秘められた事実－歴史の民話化の背景－」（奄美沖縄民間文芸学会誌2003・3発表）の研究成果にたつて、特にそこで問題となった媽祖信仰の清朝・琉球間の伝播と影響について研究を続行している。

清国の正・副使、全魁・周煌らの乾隆21年（1756）年の冊封船の久米島遭難事件は、久米島島民に救済されながら、全魁・周煌らは媽祖に救済されたことを相当強く肝に銘じている。帰国後媽祖に封号を請う。結果乾隆22年「旨を奉じ『誠観喊孚』の4字を加え」、並びに神称を明記して、「護国庇民妙靈昭弘仁普濟福佑群生誠感喊孚天后」となったのである。その後周煌は、島民への感謝の意も込めて琉球国王尚穆を通して、久米島に「天后宮」建設を薦めた。ここに「天后宮」由来の話も久米島事件がきっかけになっていることがわかる。「天后宮」碑文には、詩的な美文で媽祖信仰を称えている。しかし、久米島では「天后宮」を「菩薩堂」と呼んだりしている。なぜ、このような顛末になったか。この事件の背景を、久米島島民の家譜、琉球側の中山世譜、球陽、歴代宝案、清国側の档案（歴史史料）から読み取って、三者の立場をそれぞれ考えていく。さらに、「久米島天后宮石碑文」（周煌作）完訳を通じ、沖縄の祭祀と媽祖祭祀の構造上並びに祭祀次第の関連性について、かなりの影響関係をみているが、それらが信仰対象の異なる祖霊信仰やニライ・カナイ信仰とどう関わるのか。また日本本土、奄美の媽祖信仰との繋がりなどを考察する。

久万田晋の研究は、これまで琉球の遊行芸チョンダラー（京太郎）の伝承歌謡や芸能の実態について考察してきた。現在は以下の課題を設定している。

第一に、琉球列島各地に伝わる念仏系歌謡の系統の問題である。沖縄本島および周辺地域にとどまらず、八重山諸島や奄美諸島南部の島々には多くの念仏系歌謡が伝わっている。これらがチョンダラー伝承の念仏といかなる関わりを持つのかを考究している。

第二に、沖縄のチョンダラーの念仏系歌謡と本土の浄土系念仏思想との関係の問題である。今のところ直接の原典は指摘されていないが、たとえば『来迎寺六道絵』に表現された死生観や、説教節『小栗判官』等に現れる世界観（異界訪問譚）とチョンダラーの念仏は深い関係を持っている。これらの点についてさらに考察を深めたいと考えている。

真栄平 房昭の研究「中国沿海における海賊と琉球」は、一国史観の境界を越えて、中国の海賊と琉球との関わりを具体的に明らかにする。国家の通商ネットワークを脅かす海賊の実体は複雑で、善悪のモノサシだけで海賊＝悪党と単純にきめつけられない。国連海洋法条約では公海上で行われたもののみを「海賊行為」（piracy）と定義する。21世紀の今なお石油タンカーや商船が襲撃される海賊事件が東南アジアでは絶えない。その一つの背景には、先進工業国と開発途上国との「貧富の格差」という経済的矛盾が存在する。歴史の変動期には海賊が多発した。17世紀以降の中国では、①明清交替の動乱期、②18世紀末から19世紀初めの艇盜の乱、③19世紀後半の太平天国の内乱期に集中する。実際、福建沿海で海賊に襲われた琉球船の事例は15件を数え、最も多い③の時期に7件、全体の半数近くを占めている。19世紀後半にはイギリス海軍の蒸気軍艦が「海賊掃討」を行った結果、帆船に代わる近代蒸気船の登場によって海賊も新たな時代の転機を迎えた。

辻田忠弘、新垣敏雄、辻田登美子の「高嶺徳明と麻酔術」の研究は、「高嶺徳明と麻酔術」の視点から、三国志時代の魏の名医華佗の秘方「麻沸散」が中国（福建省福州市福清県）の医師黄会友の教えを受けた琉球人高嶺徳明により1689年に琉球に伝わり、薩摩を経て京都に渡り、華岡青洲が1804年に世界に先駆けて全身麻酔による乳癌手術に使用した麻酔薬の考案に結びついたとする想定の解明にある。

華佗の秘方「麻沸散」から黄会友までの中国の外科の歴史は中国の歴史的関連医薬書を中心に研究を進め、黄会友から高嶺徳明までを沖縄に現存する関連琉球資料を纏め、高嶺徳明から華岡青洲までは華岡青洲関連資料と国内の麻酔の歴史書から研究を進めている。また、国内には琉球、中国のほか韓国からの「麻酔と麻酔術」の流れが推察され、韓国における麻酔の歴史についての医書の研究をも進めている。

胡金定の研究は、「琉球語（首里語）に見る福建語の影響」である。福建省（「閩」とも称される）と沖縄、長崎、鹿児島、奄美など野地方との交流は既に2000年以上の歴史を持っている。特に明の時代1200年から、清の時代1800年ごろまでの間の約600年の間が最盛期であった。その間、琉球側からは、中国へ留学生の派遣、進貢船の派遣、貿易船の派遣などが行われた。中国側からは、冊封使の派遣、学者、技術者などの派遣、貿易船の派遣、福建省出身者36姓の派遣移住などが行われた。また、福州市には、両国の関係を円滑に運営するために「琉球館」を設置し、大使館と貿易センターの機能を果たした。頻繁な人的、物的な交流を行われてきたため、福州語（中国の方言）が琉球語、首里語にかなり影響を与えた。本研究は次の五つの方面から調査研究を行っていた。①動植物の名称、生物名称は、物的な交流とともに、福建省から琉球へ伝えられたものと考えられる。②料理用語、食品及び料理の名称は、中世時代には、すでに沖縄に伝えられていたと思われる。交易の盛んであった12世紀頃には、まず宮廷料理として取り入れられ、次第に和様化されて一般に普及していったものだと推測できる。③生活や道具についての用語、道具名は物と共に福州から伝わってきた可能性が高い。④音楽・芸能・伝統行事に関する言葉、音楽・芸能・伝統行事に関する言葉は、音楽や芸能と共に、福建省から伝えられた可能性がある。⑤文化に関する言葉、文化に関する言葉に関する言葉は交流によって沖縄に流入したと判断できる。

五つの項目を立てて、研究調査を行ってきた。その流入の時期、伝播の範囲、現在の使用状況はある程度明らかにしている。

「道徳と科学のインターフェース：近代化の一側面」

NO. 86 研究幹事 安武 留美（文）

同チームは、イギリス・アメリカ・日本の事象を扱う作家、文学者・歴史家の共同研究により、近代化の過程で道徳と科学はどのように関わり合い、どのような役割を果たしてきたのかを解明し考察することを目的としている。2004年度前期は、各自の研究を各々進行することに努めてきたが、今後は「道徳、科学、近代化」をキーワードとする本共同研究のためにどのような論文を作成するかを検討し、執筆にはいたいと考えている。

2004年度前期において、各メンバーは多彩な活動を行っているが、その一例を紹介すると以下の通りである。村井弦斎の諸業績を同時代の文化において再検討している黒岩比佐子（ノンフィクション作家）は、今春『「食道楽」の人村井弦斎』を岩波書店より出版し、サントリー学芸賞を受賞した。また、イギリスの例を研究中の中島俊郎（甲南大学）は、3月 "Pre-Raphaelite Vision: Truth to Nature" というタイトルで開催されたシンポジウム（於ロンドン、テートギャラリー）に招聘参加し、4月には "The Late-Vicorian Controversy: Edmund Gosse and John Chuntun Collins" 『甲南大学紀要文学編130』を出版した。また6月にはヴァージニア・ウルフ国際学会（於ロンドン大学）で "Modernism in Omega Workshops" という題の論文を発表している。ジョセフ・M・ヘニング（Rochester Institute of Technology）は、スペンサーの社会進化論と文明化をめぐる宣教師と日米思想家の議論を題材に、宗教、道徳、科学の関わりを解明することを研究課題としているが、現在はスペンサーの社会進化論から派生した様々な理論や議論を分析することに焦点をあてて研究を進めている。優生学的主張をとりいれた運動における科学と道徳の関わりを考察している大坪寿美子（Metropolitan State University）は、"Between Two Worlds: Yamanouchi Shigeo and Eugenics in Early Twentieth-Century Japan" と題した論文を *Annals of Science*, 60 (1-27頁) に発表した。また安武留美

(甲南大学)は、宗教、道徳、科学、ジェンダーの関わりを近代国際女性運動の拡大の中に解説しようとしているが、今秋 *Transnational Women's Activism: the United States, Japan, and Japanese Immigrant Communities in California* を New York University Press から出版した。

歴史的な手法を用いて研究を行っているヘニング、大坪、安武は3月に Association for Asian Studies の2004年度年会で "The Spirit of Modernization: Science, Religion, and Progress in Tokugawa and Meiji Japan" と題したパネルを組んでそれまでの研究成果を発表したが、今後はその際発表したものに加筆修正して最終的な論文へ発展させていきたいと考えている。特に大坪は、「和魂洋才と日本の近代—優生学的視点から」というタイトルで、共同研究のキーワードである「道徳、科学、近代化」に加えて「フェミニズム」という概念を用いて日本での優生学の展開を分析し最終論文とすることを決め、執筆準備の段階に入っている。東京、神戸、ミネアポリス、ロッチェスターとメンバーの活動拠点が遠く離れているため今後もEメールや電話でコミュニケーションをはかり相互に刺激し合いながら今後も研究に取り組んでいきたいと考えている。

「現代青年をめぐる諸問題」

NO. 87 研究幹事 高石 恭子

前年度に引き続き、現代青年の心理・行動に、特徴的に見られる傾向や現象を取り上げ、その性質やメカニズム、社会的背景との関連などについて臨床心理学的観点から研究している。研究員全員が大学生の学生相談にかかわっているため、文献研究、学会参加、事例研究会開催などを行い、その成果と実際の学生相談活動における現状とを結び付けて検討している。

本年3月4日、5日に東京で行われたトラウマティック・ストレス学会第3回大会では、被虐待児の発達上の問題について、様々な角度からの発表を聞くことができた。児童期の被虐待経験に起因する愛着障害がもたらす広範な問題についての基調講演、入院治療を受けた被虐待児の半数以上が発達障害をもっていたという一治療施設からの報告、教師による体罰によって PTSD (心的外傷後ストレス性障害) を発症した事例報告などは、複雑化する青年事例の理解に有用な知見を与えてくれるものであった。また、同大会では、PTSD にかんする最新の研究成果についての基調講演も行われ、PTSD とは外傷的な出来事への反応の障害であること、同じような状況下におかれても発症するかどうかには個人差があること、海馬の小さい人に潜在的な発症リスクが高いという興味深い報告がなされた。さらに、認知行動療法による PTSD の効果的な治療法を紹介する講演もあった。近年、メンタルヘルスの世界では、病因にかんする脳科学的・神経心理学的研究や、治療にかんする行動科学ベースのアプローチに注目が集まっている感があるが、教育現場における青年事例の対応には、伝統的に対話によるカウンセリングが主流である。しかし外傷性の問題を抱えて来談する青年への支援には、従来のカウンセリングによる対応だけでは難しい場合も多いのであって、こうした事例への対応にはこの大会で示されたような新しい知見を参照する柔軟な姿勢が援助者に必要であろうと感じた。

7月15日には、神戸松蔭女子学院大学人間科学部心理学科の一丸藤太郎教授を招聘し、「解離性障害への対応」と題したレクチャーをして頂いた。解離性障害の中でも、特に解離性同一性障害(多重人格性障害)とその治療にかんして、精神分析的な視点から話を伺うことができた。「悩まずに問題を自我から切り離す」解離とは、心理的な防衛機制の一つと考えられていて、現代青年の心理と行動を考える場合に必要不可欠な概念である。その解離現象が端的に現れる解離性同一性障害は、元来事例数が少ないとされていたが、今日は増加傾向にあると言われており、多重人格的な訴えも学校臨床の現場で耳にすることが増えてきた。治療や対応が困難な障害だけに、このようなレクチャーに基づいて活発な議論を行えたことは有意義であった。

今後は、これまでの研究の成果を生かし、チームの各メンバーが論文を作成していく予定である。

「NPOとコミュニティ・ビジネスマン・ボランティアネットワークの実態に関する比較研究」

NO. 88 研究幹事 鶴飼孝造(文)

本研究チームは、社会学や経済学、経営学のそれぞれから接近が試みられている新しい経済社会現象への接近を「情報とネットワーク」という学際的な視点、及び理論と実証の双方から行うことを研究課題としている。ここでいう新しい経済社会現象とは、NPO(民間非営利組織)やNGO(民間非政府組織)、地域通貨、コミュ

ニティ・ビジネスなど、経済と社会、組織とコミュニティの中間領域とでもいうべき近年台頭著しい現象を含んでいるが、同時にこれらは必ずしも研究実績が十分でない領域でもあり、詳細な事例調査とともに新しい理論的考察が要請される。

本年度は、昨年度に引き続き、内外の関連文献の収集、購読に努めるとともに、研究メンバーの担当分野について理論と実証の双方から研究を進めている。理論研究では、比較社会学、ネットワーク組織論（鶴飼孝造）、ミクロ経済学、意思決定論（三上和彦）、経済社会学、非営利組織論（宮垣元）の立場から、チーム内での研究会を重ねた。これらの研究の成果は、既に、経済社会学会、福祉社会学会などでの学会報告、学会論文という形で世に出ており、今後も日本 NPO 学会などでの報告が予定されている。また、来年度以降、英語論文や海外での学会報告も具体化していきたい。

実証研究については、平成16年9月から10月に神戸市東灘区全域を対象として実施した「高齢者の見守り・生活支援サービスと生活意識調査」（以下、東灘区高齢者調査）について報告しておきたい。この東灘区高齢者調査は、第一生命経済研究所との共同で企画・実施したもので、とりわけ NPO などの対応へのニーズが高いと考えられる独居高齢者の日常生活満足度、安心感、パーソナル・ネットワーク状況などに関する生活実態調査であり、あわせて区内で行われている見守りサービスの効果、ボランティアの参加・利用の有無などについても把握することで、地域コミュニティにおける生活支援型サービスの可能性と提供形態へのあり方を探ることも目的としている。なお、調査の実施にあたっては、東灘区社会福祉協議会、及びボランティア・センターの協力を得た。その他の調査概要は以下のとおりである。（1）調査対象：東灘区在住の65歳以上独居高齢者、（2）標本抽出法・数：住民基本台帳による無作為抽出、350世帯、（3）調査方法：訪問面接法、質問紙を用いた他記式、（4）主な調査項目：孤独感、身辺的自立度、精神的自立度、健康状態、暮らし向き、親族ネットワーク、近隣ネットワーク、高齢者支援サービスの利用、要介護認定の有無、介護サービスの利用状況、その他属性など、（5）回収率：49.4%（10月5日現在、50%強を見込み）

本調査結果については現在分析を開始している段階であるが、本年度中にまとめるべく作業を進めている。なお、調査にあたっては、文学部社会学科を中心とした学部学生に積極的にコミットしてもらい、実際の訪問調査も担当した。のべ700回の訪問調査を学生自らが行った経験は、普段の実習とは異なる調査の実践の場を知るという点で非常に有意義であった。研究プロジェクトであるが、その過程で多大な教育的効果があったことを付記しておきたい。

平成16年度研究チーム概要

◎研究課題 (NO. 89)

「男女共同参画社会の実現とその条件—働き方の考察を中心に」

* 研究の目的

男女共同参画社会の実現、とりわけ男性の家事や育児への参加に対する障害として、長時間労働が挙げられる。このことは多くの調査や研究によってしばしば指摘されてきた。ところが労働時間に関する研究に目を向けてみると、時短の必要が叫ばれた80年代終わりから90年代はじめに労働時間の減少が見られたものの、とりわけ30代の男性のなかで、過当たりの労働時間が60時間を超える人の比率が再度上昇していることが指摘されている。男性の家庭参画の必要を唱えても、このような状況下では現実から遊離した議論として浸透しえない可能性がある。したがって、長時間労働が生じる仕組みに関する理解が不可欠である。

さらに、男性の長時間労働の要因として本人、および同僚・上司のジェンダー観や家庭における性別分業、家庭をめぐるネットワークの状況を詳細に検討することが必要である。

* 研究の内容および効果

上記のような目的に向けて、インタビューおよび質問紙調査を用いて、男性の家庭参画を困難にする要因を明らかにする。20歳～60歳までの男性をサンプリングして調査票を配布。質問項目には、職場での労働に関わるものと、家庭に関わるもの、余暇活動を含める。労働に関する質問としては、労働時間の長さだけでなく、具体的な時間配分や、部署の人数、上司の態度や要求、部署の中での仕事の配分状況など、労働時間を決めるさまざまな要素を含める。家族に関わる質問には、自身の家庭での時間の使い方に加え、配偶関係、家族構成、子どもの人数と年齢、配偶者の現在の就労状況、個人をめぐるネットワークなどを含める。さらに家族観やジェンダー観など、個人の意識を問う質問も含める。

こうした調査をおこなうことによって、「男女共同参画」の必要性とその条件についての、地に付いた基礎研究の実現に貢献するものと考えられる。

* 研究チームメンバーと所属と研究課題

平松 闊 (研究幹事)	文学部	研究・調査の実施と総括
中里 英樹	文学部	家族部門の研究・調査の実施
伊豫田隆俊	経営学部	労働環境部門の研究・調査の実施
工藤 保則	仁愛大学人文学部	アンケート調査の実施 (とくに、家族、ネットワークを中心に)
大畑 秀和	甲南大学大学院人文科学研究科博士課程	アンケート調査の実施 (とくに、ネットワーク調査を中心に)

◎研究課題 (NO. 90)

「少年保護政策と日本、韓国、欧米、オセアニアの比較」

* 研究の目的

研究目的は、日本、韓国、欧米、オセアニアという原理・体系の異なる法域が類似現象—少年犯罪—についてどのように対処しているかを、法文化的な背景も含めて解明することである。

* 研究の内容および効果

本研究は、少年犯罪という言葉で括られる1つの現象に対して、日本、韓国、欧米およびオセアニア諸国が

それぞれどのように対処しているかを、各国の法構造や歴史的・社会的背景をふまえつつ明らかにするものである。具体的には、少年保護の理念実現に向けられた各国の法体系と少年保護制度の実態、少年保護施設および保護政策の現状分析を先行させながら、諸政策の背後にある治安・刑事法制、矯正行政の比較法的検討を行う。その際、法および諸政策が妥当する固有の社会、歴史、文化的特質に可能な限り配慮し、個別的にも有益なデータの蓄積を目指す。

以上のような研究は既成世代の鏡である少年、ひいては人権保障水準のパロメーターともいえる受刑者の人権保護に関し、異なる法域ではどう対処されているかの解明と比較を通じて、日本の司法制度が今後取り組むべき課題を客観的に示唆するとともに、日本ではまださほど研究蓄積の多くない欧米、韓国、オセアニアの法構造に関して、将来的にも有益なデータを提供しうるものと考えられる。

*総合研究として研究することの必要性

本研究を総合研究として行う理由は、大きく言って2つある。

第1は、本研究が幅広い対象についての多角的な検討を必要とすることである。すなわち、「日本、韓国、欧米、オセアニアという原理・体系の異なる法域が類似現象一少年犯罪一にどう対処しているかを法文化的な背景も含めて解明する」という本研究の目的を達成するためには、多岐にわたる国家について、直接的な眼目である法および少年保護政策だけでなく、それらが妥当する固有の社会、政治、歴史など、多彩なバックボーンをできるだけ正確かつ複眼的に検討する必要がある。そのような作業は、多分野・複数人の研究者による課題の整理と個別的な専門知識にもとづく分析を総合することによってのみ、遂行されうるといえよう。

第2は、検討の具体的な手段として、実態調査や比較法的考察が行われることである。これらは、フィールドワークによって実現される部分が少なくないところ、他国でそれを可能とするには、翻訳や機材の取り扱いに関して万全の体制を整える必要がある。くわえて、施設訪問その他の調査を円滑に行うには、対象機関と研究面でのパイプを有する人員をメンバーに加えることが有益かつ不可欠である。

以上から、本研究は、多分野にまたがる複数の研究者により、総合研究として行われることを必要とする。

*研究チームメンバーと所属と研究課題

前田 忠弘 (研究幹事)	法学部	オセアニアの少年保護政策
金 ムンスク	法学部	韓国の家族と法
徳永 光	法学部	英米の刑事司法制度
豊田 (平山) 幹子	法学部	ドイツの刑事司法・政策
渡辺 修	法科大学院	英米の刑事司法制度・政策
園田 寿	法科大学院	韓国の少年保護
神山 敏雄	法科大学院	EUの刑事司法
三井 誠	神戸大学大学院・法学研究科	韓国の司法制度
前野 育三	関西学院大学・法学部	オセアニアの刑事政策

◎研究課題 (NO. 91)

「知的情報ネットワークと知的意思決定支援システムに関する研究」

*研究の目的

インターネットに代表されるネットワークの普及とそのブロードバンド化により高度情報通信社会環境がめまぐるしく変化中、知的生産への価値観の移行と社会の成熟化に伴う学習や意思決定意識の高まりにより、マルチメディア及びブロードバンドネットワークをはじめとする高度情報システムの活用と多種多様なマルチメディア機器の有効活用が強く望まれる。

しかし、高度情報通信社会を支えるこのような多種多様なニーズに対応できる高速・ユビキタス・人間的マルチメディア情報環境においては、超高速・高信頼情報通信システムの利便性、安全性、信頼性およびソフト

ウェアなどの先端的コンピューティング、情報通信ネットワーク技術に関する研究開発と改善、または国内外の他大学、高校との連携による高度な教育や地域コミュニティへの応用に関するシステムの実験実証と評価などは多くの技術課題があり、早急に解決しなければならない。

一方、複雑化する現代の諸問題を解決するためには、「マルチメディア」情報を活用した的確な分析・判断を助ける意思決定支援システムの構築が望まれている。特に近年のめざましいインターネットの発展によって、インターネットを通じて得られる膨大な量のテキスト情報から有用な知識を抽出し、さらに学習機能を持たせて意思決定者の意図を汲み取ることでできる意思決定支援システムが実現すれば非常に有用である。

本研究では、多種多様なニーズに対応できる高速・ユビキタス・人間的マルチメディア情報環境における超高速・高信頼情報通信システム、コンピューティングシステムの研究開発や地域コミュニティ情報ネットワークの高度化への支援を行い、マルチメディア情報ネットワークを活用した日本経済の超短期予測モデル等への応用による投資決定や経済予測問題のモデル化とその解決方法について研究を行う。

* 研究の内容および効果

研究内容を以下の2テーマに集約し、研究開発をすすめていきたい。

1. 知的情報通信ネットワークシステムについて

(1) 高速・ユビキタス・人間的情報伝送方式に関する研究開発 (岳五一)

音声、データ、動画像などそれぞれの通信品質要求に応えられる知的情報通信ネットワークの構成と高度に融合したユビキタス情報通信ネットワークにおける高速・高品質情報伝送方式の研究開発など。

(2) 知的情報処理と高速情報処理のためのアルゴリズムの並列処理 (若谷彰良)

無線 LUN と有線 LUN の混在したヘテロな分散メモリ並列環境に適したタスクスケジューラー、データ依存性の強い問題を高スケーラブルに並列化できる P-scheme 方式の開発など

(3) 他大学、高校と地域における e-learning コンテンツなどの実用的コンテンツを用いた実証実験 (岳五一、中山弘隆、若谷彰良)

2. 知的意思決定支援システムについて

(1) 計算知能による予測と判別 (中山弘隆)

RBF ネットワークやサポートベクターマシンなどの機械学習や進化型計算法等の計算知能の技法を用いて予測・判別を行う技術を確認し、それによる学習機能を持つ意思決定支援システムの構築など

(2) 日本経済の超短期経済予測 (稲田義久)

日本経済の超短期経済予測により投資決定や経済の情勢判断の支援など

(3) 知的資産管理のためのテキストマイニング活用 (長坂悦敬)

テキストマイニングによって文書データを分類・分析し、知的資産として有効に活用するための方法論を開発する。また、文書の分析結果をビジュアル化する方法に関する研究を行う。

* 総合研究として研究することの必要性

知的情報ネットワークシステムの構築とマルチメディア情報社会における知的意思決定支援システムに関する研究は、先進的情報処理・通信ネットワークの要素技術開発から高度ネットワークインフラストラクチャの整備、機械学習や進化型計算法等の計算知能の技法を用いて予測・判別を行う技術の確立、それによる学習機能を持つ意思決定支援システムの構築や日本経済の超短期経済予測により投資決定や経済の情勢判断の支援、知的資産管理のためのテキストマイニングの活用による知的資産の利用方法の開発には一つの学部だけではカバーしきれない横断的な協力体制のもとで研究開発を遂行することが必要不可欠である。そこで、本研究では、これらの研究を有効に連携して、人間志向の高度知能情報処理手法の開発とその応用研究を行い、これからの情報社会における知識情報処理、分散情報処理などの研究を行うとともに、機械学習や進化型計算法等の計算知能の技法を用いて予測・判別を行う技術の確立、学習機能を持つ意思決定支援システムの開発、マルチメディア情報ネットワークを活用した日本経済の超短期予測モデル等への応用による投資決定や経済予測問題のモデル化とその解決方法について研究を行い、情報化社会を支える経済基盤における諸問題の解決に関する研究を行う。

本研究チームは、理工学部、経済学部、経営学部の5名の専任教員で組織され、各自の専門分野はもとより、お互いの領域にまで踏み込んだ強い連携の下で研究を推進する予定である。また、研究プロジェクトに関する学術資料や成果などをホームページ、成果報告などで公開し、抱く害の研究機関等との学術交流や提携を行い、これらの分野の発展に寄与する。

* 研究チームメンバーと所属と研究課題

岳 五一	理工学部	知的情報ネットワーク
中山 弘隆	理工学部	計算知能による予測と判別
若谷 彰良	理工学部	並列処理・画像処理
稲田 義久	経済学部	知的情報による超短期予測
長坂 悦敬	経営学部	知的資産管理のためのテキストマイニング活用

◎研究課題 (NO. 92)

「生成文法と文理解の相互関係」

* 研究の目的

生成文法による研究と文理解との相互関係を探る。生成文法理論の目標は簡単に言うならば、子供が言語をどのようにして「習得するか」の解明であるといえるだろう。そして、その解明のために文法理論はどうあるべきかを探求し続けてきたとすることができる。しかし、この研究においては、われわれが現実に文章をどう理解するかという観点は持っていなかった（仮に持っていたとしても中心的テーマではなかった）ように思われる。本研究チームにおいては、言語理論構築と、文理解のメカニズムの理論構築に関する研究の現状を正確に把握し、両者の接点を探ることを目指す。

* 研究の内容および効果

生成文法理論の目標は簡単に言うならば、子供が言語をどのようにして習得するかを解明であると言えるだろうが、そのような目標を設定して構築された文法理論において基本構造は「主要部+補部」の組み合わせであり、更にその構造の上に指定部を重ねることで基本構造が得られると想定する。換言すれば、言語の構造はボトムアップ方式に構築されると考えることになる。しかし、現実の文章は生成文法理論において想定された捉え方とは正反対に流れている。つまり、当然のことながら、われわれが文章を理解する時の方向性が「左から右へ」であり、いわばトップダウン式に文章を理解していると言えることができる。すなわち、指定部（典型的には主語）が先ず認識され、その後で主要部と補部構造が認識されるのが普通である。このように文章の理解に当たって、われわれが頭の中で操作しているであろうことを探求する分野が「文理解」(processing)と呼ばれる分野である。この方向性をもって英語や日本語の理解のメカニズムの研究が進展しつつあり、昨今の言語学の新しい潮流として注目を浴びている分野である。

本研究チームは、このような二つの異なる見地によって特定の現象（例えば束縛関係あるいは空範疇の認識）がどのように捉えられるかを比較検討することに努め、相互に新しい関係を探ることになる。このような視点からの共同研究は新しい試みであり、言語の本質を追求するのに有益な影響をもたらすだけでなく、とかく文理解が等閑視された言語学会・英語学会に一石を投じる可能性のある研究となるものと思われる。

* 研究チームの研究と分担

有村 兼彬	文学部	機能範疇の語彙的具体化について
福田 稔	宮崎公立大学	名詞句の統語構造と文理解
中谷健太郎	文学部	文理解と統語構造の相互関係についての実験研究

◎研究課題 (NO. 93)

「九鬼哲学の研究と九鬼文庫のアーカイブ化」

* 研究の目的

日本思想史の中で九鬼周造の哲学は、日本の伝統文化を西洋の哲学思想によって洗練させた。その意味で、九鬼は日本独自の思想家として特異な位置を占める。九鬼がヨーロッパにいたのは1921年（大正10年）から1929年（昭和4年）までである。パリの哲学会では、若い俊秀として認められ、とくにハイデッガーには高く評価され、ベルグソンにも認められた。また当時はサルトルとも交流があった。

本学には九鬼文庫があり、それは国内外から、資料評価が高いものとされる。しかしながら、阪神淡路大震災により、文庫が散逸するとともに破損もしている。そのために、本学の九鬼文庫の整理が進みつつあるが、それをアーカイブ化するとともに、その研究成果を公表することを目的とする。

* 研究の内容および効果

研究の内容は、まず研究員それぞれの立場から研究発表することにより、九鬼哲学の全容を浮かび上がらせる。他方で、震災後の文庫の整理と継続と本の修理・修復を行ない、資料の保存に努める。

その結果は、九鬼文庫の復活とともに、九鬼目録に従った文庫公開を促進させる。そのことによって哲学・思想界に多大な貢献ができれば。

* 総合研究として研究することの必要性

九鬼周造は哲学のみならず、芸術、文学、短歌、植物学等に興味をもち、総合的な研究が要請される。そのため、本学におけるそれぞれの専門分野の研究者が集まり、学際的な研究を行なう必要がある。

* 研究チームの研究と分担

谷口 文章	文学部	「いきの構造」と九鬼の自然観
西田 英樹	文学部	九鬼における詩歌の問題
斧谷彌守一	文学部	九鬼とハイデッガー思想
上村くに子	文学部	パリにおける九鬼の生活
港道 隆	文学部	九鬼哲学の脱構築
森 茂起	文学部	心理学概念の境界性
川田都樹子	文学部	西洋美術の日本への変容
久松 睦典	文学部	臨床と偶然性の関係
明石 加代	文学部	九鬼哲学における死と時間
石原みどり	文学部	いきの図像学
野々山久也	文学部	日本の感性的伝統
石垣 哲二	九鬼周造文庫委員	「いき」と「偶然」と「押韻」をめぐって
渡辺 理和	大阪健康福祉短期大学・九鬼文庫委員	九鬼周造と西田幾太郎